［第10回日本言語文化学研究会発表要旨］

# 初級日本語学習者に対するコンシャスネス・レイジングの試み

松浦恵津子・小川珠子・関麻由美

## 1．はじめに

（ 95.7.1 発表 ）

第二言語習得の研究を行っているプロジェクト「ＬＡＲＰ３」では、通常の授業でも Consciousness Raising（ＣＲ）を行って文法項目やストラテジーの意識化を促すことをしているが、改めて機会を設けＣＲだけを目的とした活動を行った。本研究では、ＣＲ実施前後の学習者を観察・比較することにより、ＣＲによってもたらされた効果を明らかにすることを目的とする。今回ＣＲを行ったのは、文法項目として文脈用法の指示詞・助詞・否定形とその習得過程、さらに学習ストラテジーである。対象は全員、母語が英語の初級学習者４人である。

## 2．文脈用法の指示詞のＣＲ

ＣＲに先立って行った２回のプレテストの結果において、正答率が最も低かったのは、ソ系を使うべきところで使っていないものだった。ソ系を「相手が述べたことで、自分がよく知らない事項を指す」用法と、「自分が述べたことで相手がよく知らない事項を指す」用法に分けてテストしたが、前者はア系、後者はコ系で代用される傾向がみられた。これは神尾(1990)の「なわ張り」に関する記述と関連があるのではないかと思われる。ＣＲは、①コソアの基本的な使い分けの説明、②テスト、日記、インタビューなどで学習者が使った指示詞についてのフィードバック、③ソ系を使う練習を行った。指示詞の使用状況はＣＲ前後とも (a)指示詞を使うべきところ、使ったほうが自然なところで、「何も使っていない」「ほかの言葉で代用している」「同じ語句を繰り返している」もの、 (b)指示詞が使われている場合では、誤用と正用があり、誤用の場合は「指示詞選択の誤り」と「不要な指示詞を使っている」例が見られた。ＣＲ後は指示詞の使用例が正用・誤用とも増え、特にソ系の正用が増えた。また、教師の発言（インプット）の中の指示詞に学習者が気づいている可能性を示すケースや、学習者がモニターを行っていることを示すケースが見られた。

3．助詞のＣＲ

助詞「へ・で・に」の使い分けのルール説明を行い、ＣＲ前後で書き資料、つまり日記の中での助詞の使用にどのような変化が表れるか、調査した。まず準備段階で既習助詞「は・が・を・へ・に・で・と・の」の使用状況を一覧表にして傾向を探った。そしてＣＲの当日、既習の助詞の穴埋め式クイズを実施し、訂正をしながら個々の用法を確認していき、資料を使って、学習者に混乱が見られる、助詞「へ・で・に」について使い分けのルールを説明した。（ＣＲ前は、助詞はテキストの提出順序に従って授業の中で個々の用法を導入し、とくに助詞だけを取り出しての使い分け、といった練習はしていない。）正答率では、学習者Ａは、ＣＲ前ほとんど正用がなかったが、ＣＲ後少し正用が見られるようになった。学習者Ｂは、ＣＲとの関連は不明だが正用率が着実に上昇している。学習者ＣはＣＲの前後を通じて、正用率はほぼ100 %であった。誤用の内容では、学習者Ｂは、誤用に一定のパターン（規則性）があり、学習者Ａは全期間を通じて脱落が多い。また「時＋に」に関して、過剰般化が見られる。誤用の傾向としては、先行研究で指摘されたのと同じ傾向（「で」の誤用としての「に」誤選択、「へ」の誤用としての「で」誤選択、「で」の誤用としての「へ」誤選択）が見られた。ＣＲ後の変化には個人差があるが、ＣＲ後の授業活動の中で、ＣＲ活動の中で提示したルールを用いてモニターする場面が数回観察された。

4．否定形のＣＲ

通常授業で 94/12までに否定形の導入は動詞・形容詞・名詞とも終わっている。また、94/12 から毎月１回否定形のテスト（肯定形の語を否定形に言い換えさせる形式）を行っている。これらの随時導入された否定形のつくりかたの規則を、ハンドアウトを使ってまとめて顕示的に示し、説明と練習を行った。否定形テストの結果については、正答率、否定の型の数と分布、述語範疇ごとの否定の型の適用の観点から分析したものを示し、説明を加えた。ＣＲ後の否定形のテストの結果は、正答率については、否定の型に、非母語話者的な型が増加したこと等により、必ずしも上昇していない。しかし、述語範疇に適切な型を適用した割合については、学習者Ａは上昇していないが、学習者Ｂ、Ｃは上昇し、過去否定の型を適切に適用した割合については、学習者Ａ、Ｂ、Ｃともに上昇するという結果を得た。

## 5．学習ストラテジーのＣＲ

自分の学習環境及び、学習ストラテジーの使用状況を意識させること、学習ストラテジーの一般概念についての知識を与えること、未知、未使用の学習ストラテジーの効果について意識化させること、自分の学習ストラテジーについての評価の機会を与えることの４点を目的としてＣＲを行った。方法は次のとおりである。まず、94/12 と95/3に実施したOxfordのSILL(version 5.1 1989）の結果をフィードバック。ストラテジー・システム図を配布し、学習ストラテジーの好み、自己評価等についてのディスカッションや、ストラテジー発見ゲームを行った。また、学習者の日記の中から教室外で学んだと思われる語彙を拾いだし、どこでどう知り得たかインタビューした。学習者の自己報告や授業観察から、ＣＲが学習ストラテジーの自己評価の機会となり得たこと、新たなストラテジーを使用する契機になったこと等が窺えた。

## 6．まとめ

ＣＲに対する学習者の評価は、非常に役立つという肯定的なものであった。指示詞・助詞ともに、ＣＲ後学習者がモニターするようすが観察され、否定形では、非過去／過去の分化、述語範疇ごとの分化が促進された。学習ストラテジーについてはＣＲを契機に新しいストラテジーを試みていることがわかった。今回のＣＲの結果をもって、ただちにＣＲが習得につながると考えるのは尚早だが、その可能性を示唆するものであろうと考える。ＣＲの効果についての研究を進め、教授面から学習者の意識化をどう実際の言語行動に結びつけていくかが今後の課題である。

［主な参考文献］

Hulstijn, J. H. & Schmidt, R. (eds) (1994). *Consciousness in Second Language Learning, AILA REVIEW* 11.

長友和彦(1995)「第二言語習得における意識化の役割とその教育的意義」『言語文化と日本語教育』第９号　お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

ＬＡＲＰ３共同研究者：棚橋明美・池上摩希子・畠中明子

（お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士２年）